

タイトル：誰もがジャーナリストに～教育の在り方、自己責任を考える～

授業を聴きながら感じ、考えたことを書き連ねました。

親が Dr.だからと言う理由で自身も Dr.になるということについてー

私はそれでも良いのではないかと思います。実際、共に仕事をした精神科医は、「Dr.になる頃はまだ、さほど何も考えていなかった（高い志があったわけではない）」と話していたことを思い出しました。でも、その Dr.は向学心にあふれており、私の尊敬できる精神科医の一人です。Dr.になってから出会う人も影響を及ぼすと思いますし、金澤先生の仰る様に出会いは大切でしょう。元々優秀だったのでしょうが、良い先輩 Dr.との出会いが更にその Dr.を育てたのではないかと、勝手に分析しています。

Dr.の教育についてー

Ns.もそうですが、コミュニケーションとか、対「人」であることに関する試験を取り入れてほしい。カリキュラムでも、「人として」みたいなこと（所謂、道徳や倫理に関することになるでしょうか）を、あらためて教える。そういう教育制度を検討してほしいと考えます。そして勿論、I.C についても、「説明と同意」は間違っただけだったと。金澤先生の「説明と納得」とか、隈本先生の「情報と決断の共有」というように、これまで授業で出されたような例をあげて、それこそ、「説明」しなおして学生に教えてほしい。

また、日野原先生がよく仰る、「医療関係者になろうという者は、死なない程度に病気になった方がよい」ということも、教えた方がよいと考えます。私も、Pt.の立場に立つように、とは教えられましたが、やはり同じ立場に立ったものでないと中々わかり得ないということも現実です。まあでも、こればかりは、なりたくてなるものでもないし、逆に「自己管理も医療職としては仕事の一部」なので、実際には難しいというか、バランスの問題もありますね・・・。

体験談なども、今は看護学の授業などで多少取り入れているところがあるようですが、医学部や他の医療系学校でも取り入れることをお勧め/お願いします。生の声を聴くことはかなり教育的なのではないかと考えます。そして、その体験を聴いたり、闘病記を読んだり、ディベックスのサイトを見たりして discussion や、report 提出する。そういうことは、現場に早期に関わる一歩となりうるのではないかと思うのです。それはしかし、医学関係のみならず、一般教育にも取り入れる必要があるでしょう。なぜなら、誰でもさまざまな病気

に罹る可能性はありますから。

国レベルのことー

自分を含めて、国民全体がもっと勉強をしなければならないと感じています。そして、自ら主張していかなければならないのではないのでしょうか。いつまでも、「～任せ」というのはそろそろ卒業すべき。考えてみれば、受け身すぎますよね。古き良き日本が維持されていれば、それでも良いのかも知れませんが……。良い意味での「自己責任」を考え、身に着けていきたいものです。

マスコミの記者教育も見直すべきと隈本先生は仰っておられましたが、国民全体が知恵をつけていけば、記者教育の一端を担えるのではないのでしょうか？

金澤先生は、Dr.は聖人ではないと仰っておられましたが、Dr.をPt.が育てるように、マスコミも国民全体で育てられればと、少しだけ思いました。

医療制度についてー

総合医を育てるべく制度を検討すること。これは、Ns.も同じと考えます。専門化が進んで大分経ち、その利点もあれば不都合なことも問題になる中、総合的に診ることの重要性・必要性が叫ばれて久しく思いますが、中々改正されずにきています。変えるべきですね。

そして、「コメディカルの点数化」や、「地域の医療相談システム制度」など、諸外国に見倣うべき良い点は、取り入れるべく検討されることを望みます。よく、うわべだけ取り入れられたりしますが、よく吟味しながらでないとい、I.C.のようになってしまいますね。でも、真面目に検討され、導入されれば、そして、それに税金が使われるなら国民も納得するのではないのでしょうか？

おまけー

I.C.の訳については、今からでも普及し直すことが大切と考えます。

また、CTの被曝のことなど、検査の説明では実は見落としがちなデメリットも説明すると、例えば法的に決めてしまうとか……。説明しました」などというハンコではなく、もし作るなら、説明を受ける側が「とてもわかりやすく説明してもらいました」にするとか……。

良し悪しは別として、中国の病院見学をした際、毎年5月12日になると、Pt.さんから評価されたNs.が顔写真入りで病院の入り口に張り出されるという取り組みがあることを思い出しました。

主張すべきですね。だれもがジャーナリストの気持ちで。